

# Meet *the* BOSS



## 石橋 俊

(いしばし・しゅん)

1958 (昭和33)年2月埼玉県羽生市生まれ。1976 (昭和51)年、東京学芸大学附属高校から東京大学理科三類進学。1982 (昭和57)年3月、東京大学医学部卒業。卒業後は東京大学医学部附属病院での研修を経て東京大学医学部第三内科入局、2研の村勢敏郎先生のもとで脂質代謝、糖尿病、内分泌代謝の研究を開始した。1989 (平成元)年11月から1994 (平成6)年2月にかけて、米国のUniversity of Texas Southwestern Medical CenterのBrown & Goldstein研究室に留学、選りすぐりの同僚研究者らと切磋琢磨を続け、苦心の末にLDL受容体のノックアウトマウスの作製に成功した。マウスの表現型解析とそれをもとにした遺伝子治療を報告した論文は、現在も多くの引用回数を誇っている。帰国後は東京大学医学部附属病院第三内科助手、同糖尿病・代謝内科助手として薬学部研究者らとの共同研究を開始、医学の垣根を取り払うことによる医学研究の新たな可能性を示した。2001 (平成13)年、自治医科大学内科学講座内分泌代謝学部門教授に就任、以後、糖尿病センター長、臨床栄養部長、RIセンター長を兼務しながら、20年にわたって大学病院の三本柱である教育・研究・臨床に力を注いだ。2023 (令和5)年2月、祖父の開業の地である埼玉県羽生市にいしばし糖尿病内分泌内科クリニックを開院、自治医科大学を退職後、地域住民の健康増進と疾患予防、福祉の向上にこれまで以上の情熱を注いでいる。現在、いしばし糖尿病内分泌内科クリニック院長および自治医科大学名誉教授。



聞き手

## 岡崎 啓明

自治医科大学医学部内科学講座内分泌代謝学部門准教授

## ■ 転勤族の理系少年

### 祖父、両親と同じ医学を志す

— 先生の退任時に子どもの頃のお話を聞く機会があり、印象的なエピソードが多かったです。あらためてどうい  
うお子さんで、どのような夢をもっていたか、子どもの  
頃の思い出をお聞かせください。

「簡単にいえば、ただの漬垂れの暴れん坊です(笑)。親が転勤族だったから、子どもの頃は各地を転々として、生まれたのは母の里帰り出産で埼玉県ですが、住んでいたのは福島県の平(たいら・現在のいわき市)です。その後岩手県宮古市、福島県福島市と移りました」

「その頃の記憶はほとんどないのですが、親の話では、幼稚園の年少のときに大工さんの家に上がり込んで帰ってこないことがあったそうです。その大工さんに櫛そりを作ってもらっていたのです。木製でも割と頑丈で、小学校ぐらいまではその櫛で遊んでいました。あるとき、氷が張った田んぼで櫛で遊んでいたら、落ちてどこかに頭をぶつけたのか、みんなが僕を背負ってきて、親に『俊ちゃん、寝ちゃった』。脳震盪を起こしたらしいです(笑)。2月生まれだったので、早く生まれた同級生たちにコンプレックスを感じていました」

「理科的なことが好きで、化石採集に凝っていた時期もありました。住んでいた福島市は、河原を歩いていると、割ると化石が出てくる石がよくみつけられました。それが面白くて、河原をうろついて、石を割っては化石を集めることに熱中しました。近所のお寺で魚の骨格の化石を表面に刻んだ鐘楼の台座をみつけたことがあり、『これは!』と有頂天になりましたが、割るわけにもいかなないので、やむなく石膏で型を取って持って帰りました。まだ家にあるかもしれないです」

「少年時代の出来事で一番衝撃的だったのが、アポロ11号の月面着陸でした。小学6年生の夏のことです。強い影響を受け、将来はロケット工学の仕事につきたいと決心して、早速硝酸カリウムなんかを買い込んで、それを筒に詰めて火薬の類を友だちと作ったりもしました。



推定1歳、福島県平市近郊の漁港で。右手に生きた魚を持っている。父は写真撮影がうまかった。

よくケガをしなかったと思います(笑)。今も尊敬する人を聞かれると、アポロ計画を主導したヴェルナー・フォン・ブラウン博士と答えます。ほかにも尊敬する人はいると思いますが、こういう人になれたらと心底思ったのはブラウン博士です。このように、少年時代は、化石やロケットに心を奪われる、かつこよくいえば、地質時代や宇宙空間規模の時空に憧れる少年でした」

— 医学部を志望されたのは高校時代ですか。

「高校3年生の願書を出す直前です。それまでは理系というだけで、旗幟鮮明にしていませんでした。両親も祖父も医者でしたから、医学部に進むのが自然なのでしょうけれども、小中高と反抗期で、親のようにはなりたくないと思っていました。気質として、古い権威的なものが覆ることになぜか胸が高ぶるところがあり、フランス革命が大好きでした。父親は子どもにとって権威の象徴なので、父親に負けたくないという反発心が常にありました」

「理系に進もうとはずっと決めていましたが、高校時代に文学や哲学に触れたことで、思想家や文学者のような、世の中になにかしらの影響を与えられる人間になりたいと考えるようになりました。そのとき頭に浮かんだ



1979年、鉄門新潟戦。新潟大学の五十嵐グラウンドにて。

のが、森鷗外、斎藤茂吉、安部公房ら、東大医学部出身者で最終的には医学とは違う道に進み、社会的影響力を持ち続けた人々たちでした。医学部に進めば、文系の素養も磨けるかもしれないと思い、最終的に医学部進学を決めたのです」

## ■ 幅広い知識と経験を期待して内科に進む 登山をヒントに「研究は垂直登攀」

— 実際に医学部に進まれていかがでしたか。

「教養課程のときは面白いと思う講義もありましたが、医学部に進んで解剖の授業が始まったりしてからは、講義も面白くなくて、『変なところに来てしまった』と感じました。母に『なんで医学部になんか入ったんだろう』みたいなことを話したこともあります。当時の私にとって魅力的な講義をする人が少なかったのかもしれない」

「そうしたなかで興味を惹かれたのが本庶佑先生の免疫グロブリンの遺伝子再構成の講義でした。本庶先生は当時栄養学教室の助手でしたが、講義を聞いて自分もこういう研究をやってみたいと思いました。たまたま陸上部に本庶先生のもとで研究している先輩がいたので、『僕もこういうことやってみたいんだけど』とおそろおそろ申し出たところ、『それじゃこれを読んでおいて』と制限酵素のEcoRIの精製方法に関する英語の原著論文を渡されました。読んでみたのですが、まったくちんぷんかんぷんで、基礎医学はダメだ、向いていないという気持ちにさせられました」

— 医学部卒業後、内科に進もうと思われたのはどうしてだったのですか。

### ■ 卒業後の歩み

- 1982年3月 東京大学医学部卒業
- 1982年 東京大学医学部附属病院研修医（第一内科・第三内科）
- 1983年 小平記念東京日立病院内科研修医
- 1984年 東京大学医学部附属病院第三内科
- 1989年11月 University of Texas Southwestern Medical Center at Dallas（～1994年2月）
- 1994年2月 東京大学医学部附属病院第三内科助手
- 1998年 東京大学医学部附属病院糖尿病・代謝内科助手
- 2001年 自治医科大学内科学講座内分泌代謝学部門教授
- 2009年 自治医科大学附属病院糖尿病センターセンター長（併任）
- 2012年 自治医科大学附属病院臨床栄養部部長（併任）
- 2013年 自治医科大学RIセンターセンター長（併任）（～2017年）
- 2023年2月 いしばし糖尿病内分泌内科クリニック開院（院長）
- 2023年3月 自治医科大学にて最終講義

現在に至る

「親父は脳神経外科医で、自分も小さなものをいじることが好きだったので、受け継いでいる部分があるのかもしれないと感じ、進路を決める時点では半分以上は脳神経外科に行くと考えていました。一方で、同じ道を選んで親父を越えられなかったらかつこ悪いとも思いました」

「とは言え、基礎医学が向いていないこともたしかでしたから、やはり両親がやってきた臨床医を目指すのが自分にはふさわしいと考えました。決めたのは本当に直前で、仲良くしていた連中がみんな内科に行くので自分も行くことにしました（笑）。それに内科に進んでおくほうが、医学を含めていろいろなことがより広く学べるのではないかとも思ったのです」

— 先生は医学部時代、陸上部と山岳部をかけもちされました。私はいずれも後輩にあたるのですが、なにか印象に残っている出来事はありますか。

「登山は山岳部で行く以外に、ソロ山行もしました。新田次郎の『孤高の人』の加藤文太郎や8,000m峰無酸素単独登頂を次々と達成していたラインホルト・メスナーに感化され、1人で登頂したら達成感がすごいだろうと感じたのです。教養2年の秋休みに、40kgの荷物を背負い、小屋泊しない6泊7日で、立山から入って剣

## Data of Shun Ishibashi



瑞垣山において日本百名山完登記念。高橋将文先生・千葉泰子先生ご夫妻と。



富士山山頂。Joachim Herz先生と。

**趣味：**運動、音楽鑑賞、観劇、読書、登山(年2～3回)など。「毎週継続しているのはランニング、筋トレ、水泳」「最近J-POPが大半だが、勉強・読書中はクラシック。年3～4回はライブ、コンサートへ出かけます」

**得意な外国語：**英語(得意というよりこれしかできない)「大学の第二外国語はドイツ語、ラテン語も履修した」

**好きな食べ物：**果物、寿司、天ぷら、焼肉、鰻……なんでも食べます。

**好きなテレビ番組：**定年後はNHKプラスでドラマ、クロ現など。ラジオはFM東京の番組いろいろ。妻のネット配信映画鑑賞におつきあい。

**好きな歌手：**サザンオールスターズ、あいみょん、松任谷由実、竹内まりや、中島みゆき、財津和夫、ゆず、ホイットニー・ヒューストン、エド・シーラン、シェネルなど。

**愛読書：**いわゆる乱読。同時代作家では村上春樹、池井戸潤、沢木耕太郎、平野啓一郎、角幡唯介、桐野夏生、アンソニー・ホロヴィッツ。

岳を登り、槍ヶ岳から穂高連峰の大キレットを制覇したら、格別な達成感がありました」

「山岳部には医学部進学後に入部しました。思い出深いのは、登山中に2回落ちてどうにか命拾ったことです。最初は越後三山の三国川にある十字峽<sup>註</sup>で、2度目は尾瀬の奥にある平ヶ岳に突き上げる水長沢です。荷物の重さや疲れで注意散漫になるし、周りがかんたん行くと、負けまいと焦るから、特別なバランスと慎重さが必要とされるクライミングは向いていないのかもしれない。その後も懲りもせず登山は続けていますが、山には危険が潜んでいるので、注意しています」

——先生が山を登るときの、困難に負けずに前に進んでいく姿は、のちの研究者としての姿に重なる気がします。以前先生から「研究は登山と一緒に、垂直登攀じゃなきゃいけない」と言われたことを思い出します。

「これは僕の専売特許ではなく、小坂樹徳先生がご存

命だった頃、東京女子医科大学で非常勤講師をさせてもらったことがあり、そのときに送られてきた女子医大の会報に小坂先生がそういう内容のことを書いていらしたのです。僕は山に登るから『垂直登攀』という言葉が腑に落ちて、『なるほど、水平思考よりは垂直思考のほうがいいのか』と納得できたのです」

「研究においては、これもできるかもしれない、あれもできるかもしれないと横に広げるより、登るにしても下るにしても、縦方向に距離を詰めていくほうがいい、そういう意味に僕は解釈したのです。僕自身がとすれば横へ横へと行きがちで、もちろん、時には横へ広げる必要もありますが、研究は積み上げていくのが理想的という自戒を込めての話です」

注：三国川左岸の林道を歩いていると突然足元の土がなくなって地面にめり込み、気がつくと高さ3mほどの空洞の底の水面に浮いていました。2025年1月に埼玉県八潮市で起きた下水道漏水による陥没事故と類似の事故でした。



村勢敏郎先生ご夫妻と。弘前での学会終了後、レンタカーでマザーツリーに向かう途上の道の駅に立ち寄ると、マザーツリーから帰ってきたご夫妻に偶然遭遇した。台風で弘前―東京便が欠航になる偶然の結果でもあった。

## ■ 糖尿病・脂質代謝研究を開始する 北徹先生の推薦で名門ラボに留学

— その後、第三内科の2研で脂質代謝や糖尿病を研究領域に選ばれたのは、どのような経緯だったのでしょうか。

「第三内科の研修時に受け持った症例の1つが筋炎と脂質異常の併発例でした。倉林正彦先生の患者さんで、引き継ぐときに可能性のある疾患を指摘されました。思いもよらない疾患ばかりでしたから、専門の先生方に教えを請うことにしました。脂質異常を板倉弘重先生に相談したところ、データをみながら、『村勢先生ならわかるかもしれない』と村勢敏郎先生を紹介されました。村勢先生のもとでリポタンパクリパーゼ(LPL)活性を測定したり、筋炎との関連性を検討していくなかで、論理的に疾患の可能性をしばっていく考え方がとても面白いと感じたのですね」

「2研に入った決め手のもう1つは、その疾患ではあまり亡くならないような領域を専門にしようと考えたということでした。当時第三内科の疾患領域で死亡率が高いのは血液疾患と肝臓疾患で、患者さんが重症になれば、泊まり込んで処置しなければいけません。肉体的にも精神的にも大変な重労働で、これが続いたらとても体がもたないと感じました。そこで目をつけたのが糖尿病でした。糖尿病は本来別の研究室でしたが、村勢先生も糖尿

病の合併症を手がけていましたし、糖尿病研究室の赤沼安夫先生の下にいた山田信博先生や高橋慶一先生も村勢先生と仕事をしていたので脂質代謝も内分泌代謝も研究できるから、間口が広そうだと思います」

— どのようなきっかけでダラスのUniversity of Texas Southwestern Medical Centerに留学されることになったのですか。

「当時の第三内科では、ある程度トレーニングを積んだら留学するのが既定路線になっていました。僕は入局して5年目になるので、どこかに留学したいと候補先をリストアップしていました。1985年にJoseph Leonard Goldstein (以下、Joe) とMichael Stuart Brown (以下、Mike) がコレステロール代謝のLDL受容体経路を発見してノーベル生理学・医学賞を受賞しており、彼らのいるダラスのUniversity of Texas Southwestern Medical Centerも候補の1つでした。Joeとは、受賞の翌年の国際学会で、講演後のパーティーで握手したことがあり、一応面識はありました」

「留学先の候補をダラスを含めて3カ所にしぼりました。すぐに受け入れの返事をいただいた施設もありましたが、ダラスからはいつまでも返事が来ません。仕方がないから最初に返事をくれた施設へ留学するつもりでいたところ、しばらくして国際学会から帰国すると、いきなり山田信博先生に『おまえはダラスに行くことになったから』と言われました。山田先生の話によると、Joeが京都大学の北徹先生に『イシバシってどういう男だ?』と尋ねてこれ、北先生が『彼はとても優秀なナイスガイだ』と推薦してくださったとのことでした」

「僕が2研でやっていた仕事は、リポタンパク受容体やアポリポタンパクE(アポE)など、おもにJoeとMikeの研究を模倣する内容でしたから、彼らは僕にとって非常に親近感がありましたし、北先生が留学されていたということも大きかったです。山田先生や当時の第三内科教授の高久史麿先生も勧めてくださるので、『じゃあダラスに行きます』と決めたのが1988年冬のことでした」

## 苦手を克服するための読書習慣がいつしか読書好きに

「昔から国語に苦手意識があり、克服するために中学生の頃から不得意分野を中心にできるだけたくさん本を読むようにしたところ、かえって本を読むことが好きになりました。高校時代、ある教師に『どうせ読むなら原典を読め』と言われたのをきっかけに、ジャン＝ジャック・ルソーも聖書も原典を読むようにしました。ルソーは読破できませんでしたが、聖書は東大YMCA 寮で旧約聖書を読み、新約聖書も何回か読みました。学生時代は夏目漱石や永井荷風、正岡圭規あたりは、岩波文庫に入っている分は全部読んだと思います。最近の作家では、司馬遼太郎や村上春樹、沢木耕太郎らの作品は読破したいと思っています」

「読書のメリットは、勉強になるのはもちろんですが、もう1つは、癒しというか、現実逃避というか、読んでると心が和むという面があります。また、英語で物を考える習慣をつけたいと思うのですが、英文論文は自分の関心領域に近い内容でないと興味もてません」

「SFやミステリー、ビジネス解説書、人類学関係の本を英語で読んでいます。ジャレド・ダイヤモンド、ユヴェル・ノア・ハラリ、ダン・ブラウンあたりは原書でも難しい単語が少なく



クリニック2階の書庫。村上春樹やハンス・カロッサのほか、SF・ミステリー・人類学・ビジネス啓蒙書など、ジャンルも内容も多岐にわたる書籍が所狭しと並ぶ。

読みやすいです。引き込まれると、頭のなかで英語での思考回路に変化します。JoachimやJonathan Cohenらと話しても、話が論理的につながるのを感じます。でも、最近は年齢のせい、たくさんは読めなくなりました」

## ノックアウトマウス作製に成功 帰国後、医学の垣根を越えた共同研究を 試みる

— 留学してみていかがでしたか。LDL受容体のノックアウトマウスはどのようにして作製されたのですか。

「留学直後は英語が聞き取れなかったですね。特にJoeは何を言ってるのかさっぱりわからず、彼らもこれはダメだと思ったのか、京大から留学されていた横出正之先生の下につけてくれて、LDL受容体トランスジェニックマウスの解析のお手伝いをさせてもらいました」

「しばらくしてJoeに呼ばれ、LDL受容体のノックアウトマウスを作れと言われました。Joachim HerzがLDL受容体関連タンパク質(LRP)のノックアウトマウス作製に取り組んでいて、彼に教えてもらえということでした。Joachimはドイツの欧州分子生物学研究所(EMBL)でLRP1のクローニングを研究しているところを引き抜かれてきた男で、分子生物学の分野で一目置かれる存在でした。Joachimには『コスミドライブラリー

作りからやるように』と指示されました」

「コスミドは20～30kb採れますが、ラムダファージのライブラリーも10kbは採れるから本当はファージでも十分なのですが、コスミドでスクリーニングしたところ、半年経っても全然採れません。そこでファージに変えたらすぐに採れました。その後ベクターを胚性幹細胞(ES細胞)に導入してキメラマウスを作ろうとしたのですが、やれどもやれども、ブチがパラパラあるネズミしかできません。Joachimに相談しようとしても、夏休みに入ってしまった。戻ってきた彼に交渉して新しい細胞をもらい、ようやく100%キメラのマウスが作製できました」

「論文は“The Journal of Clinical Investigation”(以下、JCI)に掲載されました。本当は“Cell”あたりに掲載したかったのですが、JCIと言われたときは少し落胆しました。そのときに言われたのは、『ノーベル賞を一番輩出したのはJCIだ』ということでした。『掲載雑誌にこだわると、意味のある仕事をするようにしなさい』という意味だったと思います」



病棟回診終了後に、BSLの学生・教室員らと新棟のラウンジを見学がてら記念撮影。

— 帰国後の先生のお仕事で私が印象に残っているのは、薬学の先生方との共同研究です。当時、先生はしばしば「餅は餅屋」と言われていましたが、一連の共同研究はどのような経緯で始まったのですか。

「薬学の先生方とのジョイントを思いついたのは、ガスクロマトグラフィーや質量分析やバイオインフォマティクスに関する知識が乏しかったからです。実際に動かしている方々にアドバイスを受けないとうまくいかないと思いました。新井洋由先生が身近にいらしたので、先生にホルモン感受性リパーゼ (HSL) の残存活性や新たなタンパクの生成などについて教えてもらいました。供田洋先生は、新井先生に紹介され、コレステロールアシル転移酵素 (ACAT) 阻害薬の抗動脈硬化作用を検証したいので、動脈硬化モデルを使わせてくれないかというのが共同研究の始まりでした。東大には一流ラボも多く、もっとオープンにすれば医学研究にも新たな展開が開けるのではないかと感じ、少しもったいない気がします」

## 退任後は専門クリニックを開院 利他的精神があればこそ人生は面白くなる

— 2001年に自治医科大学で内分泌代謝学部門の教授に就任されます。

「自治医大に行って最初の5～10年はそれまでの仕事をまとめることが中心になりました。基礎研究としては、コレステロール合成酵素のHMG-CoA還元酵素やLPLの組織特異的ノックアウトマウスの仕事がメインでした。永島(秀一)君や高橋(学)君が頑張ってくれましたが、特にマクロファージのLPLは東大の2研で村勢先生に最初にいただいたテーマで、40年前にもらったテーマにやっと答えを見つけたという感慨がありました。東大に比べるとリサーチマインドの人が少ないし、臨床の教室で大規模な基礎研究に取り組むことは難しいと感じたので、臨床研究や症例解析などを1つ1つまとめることを指導しました」

— 現在のお仕事についてお聞かせいただけますか。

「2023年2月に埼玉県羽生市に糖尿病と内分泌専門のクリニックを開院して、現在は一介の開業医として頑張っています。当初は患者さんも少なくて不安でしたが、ようやくある程度軌道に乗ってきたように思います。大学病院時代とはまた違って、開業医はやらないといけなことが多いですが、僕は臨床が好きなので、この状況をそれなりに楽しんでいます」

— 先生の好きな言葉、座右の銘を教えてください。

「教授退任記念誌には、『Honesty is the best policy.』とか、『Party is over, go back to the bench.』『Stay hungry, stay foolish.』『草莽の志士』を挙げましたが、ここでは記念誌には書かなかった言葉を挙げたいと思います。『Life is an exciting business and most exciting when it is lived for others.』というヘレン・ケラーの言葉です。要するに、人生は面白いけれども、特に面白く感じられるのは、誰かのために生きるときだという意味です。利他的精神を忘れない言葉として、いつも念仏のように繰り返し唱えている言葉です」

— それは私の好きな言葉でもありますよ。

「本当？ そんな偶然があるんだね。利他的という意味では、人間はどうしても自分中心になる面があります。それが強くなると、人生は面白いものではなくなるのではないのでしょうか。臨床医学は、自分を忘れて人のため

にさまざまなことを考える必要がある仕事という意味では、紆余曲折はあったけれど、今そういう立場にいられることは幸運だと思いますね」

## ■ 未知の領域に果敢に挑む フロンティアスピリットを忘れないでいたい

— それでは、最後に若手研究者たちに向けて、メッセージや提言をお願いします。

「日本では、ある程度サイエンスで実績を残した人が、途中から教授になるのが目標になり、教授になったら次は病院長が目標になり、次は学部長、次は学長あるいは学会長・理事・理事長というように、立身出世を目指す人が多い気がします。JoeとMikeはサイエンティストにキャリアは関係がないと言います。彼らは何かの組織のトップになっているわけではなく、管理職的な仕事はほかの人に任せて自由に研究に打ち込んでいます。日本の研究者とはかなり違うと感じます」

「そもそも、彼らがコレステロール代謝を研究領域に選んだ理由は、彼らの言葉を使えば、backwater、要するにどぶ川みたいな誰もやろうとしないところだから自分たちがやったのだそうです。既定路線を登っていくの

*Life is an exciting business and  
most exciting  
when it is lived for others.*

ではなく、誰も行ったことがないところだからこそ、積極果敢に開拓していく価値があるというのです」

「まさにフロンティアスピリットです。彼らのこうした精神に強く共感しますし、若い先生方にもぜひこのことを知っていただきたいです。自分でも今後も彼らを見習っていきます」

## “Boss”との思い出 ..... 岡崎 啓明

最初の出会いは、東大病院で私が神経内科の研修医をしていたときでした。担当患者さんについて内分泌的にわからないことがあり、「外来主治医：石橋」とあったのを、私はうっかり下の名前も確認せずに、間違えて石橋先生にお電話してしまいました。そんなおっちょこちょいな研修医にも先生はとても丁寧に教えてくださいました。臨床家としてまずとても親身で親切で、そして知るにつれ基礎研究もオリジナリティの高い面白い研究をしている、そんな先生に惹かれて、私はこの道に入るようになりました。駆け出しのころ、スキー旅行に卓球大会、夜明けまで実験していた私と朝早い石橋先生のおはよう・さようなら、共通の趣味の沢登りでの屋久島登山など、思い出は尽き

ることがありません。研究の垂直登攀から始まり、要所要所で大切なアドバイスをいただいたことも一生忘れません。

今回、ヘレン・ケラーの名言が石橋先生の手書きの文字で書かれているのも大切な宝物になりました。先生の字をみると、びっしりと書かれていてとても勉強になった手書き時代の先生のカルテや、論文を出すときにサイン集めをした頃の先生のサインなど、懐かしく思い出します。当時は先生のご自宅によくバーベキューに呼んでいただいたりして色々なお話を伺ったものですが、今回の子供時代のエピソードもまた小説のようで大変面白く、楽しい対談をありがとうございました。新たなフロンティアでの益々のご活躍を心より祈念しております。